

の匂ひが最も高い。併し神社にしても風景にしても、十萬の人を引きつけ七千の人を宿泊させるだけの魅力が果してあるだらうか。そこに帆船時代の港町の傳統の力を見のがすことは出来ぬ。と同時に、附近に大社があり、風景で名高

い松江があるといふことも大きい關係をもつてゐる。美保だけを目的の客は恐らく非常に少いことであらう。して見れば大社や松江と共に、一種の双児式若くは姉妹式門前町又は遊覧町と云ふべきであらう。(完)

江濃境上に於ける美濃の山村

— 養老郡時村字時山に就いて

秋 山 桓 士

京都帝國大學の小牧助教授の「姉川上流の村々」(本誌二二卷一號)、「近江カルストの村々」(同二三卷二號)を始め其他

ある。特記して好ヒントを與へられた小牧先生に感謝の意を表したい。

一

の山村に關する御勞作は豫てより美濃の山村の研究に興味を有する私に取つて此の上なき良き指針ともなり又強き刺激ともなつた。本小篇は本年四月の初小牧助教授の近江カルストの村々のコースを遂に、美濃の時村から五倍越えして多賀に出た際の小さい收穫であつて、私の目下調査中に屬する「牧田川及び粕川上流の山村」と姉妹篇をなすもので

時山は揖斐川の支流牧田川の谷源に位する鈴鹿山脈東斜面の一山間聚落である。標高七〇〇乃至八〇〇米の山地に圍繞された深いV字型の浸蝕谷の谷壁、即ち東流する溪谷の南北兩岸に

沿うて細長く東西數列の階段聚落を營む、戸數百十七より成る典型的の山村である。

此の部落の重要交通路は唯一筋の小徑で勢州街道に沿うてゐる時村字下山から溪流傳ひに西へ分岐して約四軒で此の地に達する。而して之より更に二軒の急坂を西に登れば海拔五〇〇米の五僧峠を越えて近江に入る、救済道路工事で漸く自轉車を通ずる程度になつた狭い急傾斜の山道ではあるが、史的には關ヶ原役當時に於ける西軍の主力島津義弘の敗走路として有名である。

二

時山は古くから木炭の産地として知られてゐる。此の村は水田の少しもない唯申譯的な僅かな茶畑と桑畑の見える四つの溪谷から成つてゐる。即ち簸谷、阿蘇谷、毘沙門谷及び登り谷が之である。時山の主要生活資源たる「時山炭」と稱する年産額二十萬貫の良質なる黒炭は此の四つの谷から産出されるのである。何れの谷の製

品でも總て區別なく時山炭の名稱で、其の價格にも甲乙はないが、就中簸谷の産が量も多く質に於ても他を壓し、其の産額は時山炭總額の六〇パーセントを占めてゐる。之は溪谷が深く山林面積も大で原料の木材がよくヒネテゐるからである。山地で蕨、ゼンマイ、石楠花等の群生する谷は一般に地味が瘠せてゐて、是等と混生する樹木からは良質の木炭を産しないと言はれるが、簸谷にはかゝるものの少ない最も炭焼に適する木材に富む經濟資源豊かな谷合である。

岐阜縣では木炭検査施行以來一齊に市場に出す木炭は五貫俵に改正統一されたが、時山炭は前後二十三年に亘る其の筋への陳情の結果七、八年前より例外が認められて今尙八貫俵制を維持してゐる。(木炭検査施行以前の時山炭はダラ俵で統一がなかつた)其の理由を聞いて見ると時山は炭俵の原料となる萱の野生が極めて少ない處である。畑附近の萱などは一本でも大切に刈取ると言ふ風で、不足の分は麓の細野或

第一圖 美濃養老郡時村字時山附近の地形（五萬分一彦根東部圖幅に據る）



は近江の保月等から買ひ入れ、又は方々の縁故者から貰ひ受け、冬の間に炭俵に編製する。買へば炭俵一個の値段は少し位大きくても小さくても同じだと言ふから、そこで時山では成るべく萱の消費經濟の點から大俵を希望するのである。其の他背板で背負うて山路を運搬するにしても八貫俵二俵の方が五貫俵三俵より背負ひ易いことや、保守的な山村の人々のあらゆる生産技術の方面から大俵が好都合であつたと思は

江濃境上に於ける美濃の山村

れるが、萱の寡産による俵原料の消費節約が八貫俵制を保持させた要因の一であるとすれば其處に地理的興味が存する譯である。（但し萱の多産地保月や五箇などにも八貫俵と六貫俵の制があるから萱の産の多少のみが要因でないことは明かである。）萱と言へば此の村は約三十年前に二度も大火に襲はれた爲に、山村には珍らしく萱葺の家屋が少なく、切妻瓦葺の平屋が大部分を占めてゐる。之も主として屋根の材料たる萱

に恵まれない地理的制約の必然的現れかと思はれる。

時山炭は大部分産業組合の手を経て三重縣方面へ出荷される。之は從來の取引關係もあり其他交通機關、消費地との距離等の相關的結果であらうが、一は時山の木炭のみが八貫俵である爲に、岐阜縣内に於ける標準俵との建値の相異から生ずる賣買取引上の不便が縣外移出を誘導するに至つたのではなからうか。

次に藪谷や阿蘇谷には山葵の野生を見る程なので現在では阿蘇谷に縣營の試作地が設けられ、在來種の外に静岡産山葵なども栽培されてゐる。此の地の山葵は概して品質優良ではあるが、年産額僅かに一千圓内外主として三重縣へ出荷する。養蠶も春蠶、夏蠶、秋蠶と一時は可なり行はれたこともあるが、今では蠶絲價格の下落によつて不振に陥つてゐる。

そこで製茶が山稼ぎの裏に行はれ、副業として最も重きをなしてゐる。麓の水田の村々で農

業に忙しくなる五月頃から時山では製茶工程が始るのである。茶の芽は昔は大抵多良から買入れてゐたが、近頃は直ぐ川下の時村からも仕入れる様になつた。時山の山谷の僅かばかりの平地と言ふ平地は勿論、谷の南向斜面の砂礫混りの畠と言ふ畠には必ず茶の樹を見受けるが、それのみでは原料の不足を告げるので相當の移入を必要とするのである。

多良や時は農村で勞働力の關係から十分製茶にまで手が届かないが、山村である時山には餘剰の勞働力を利用して副業として規模の大小の差はあるが、各戸共大抵製茶を營んでゐる。又中には特に職人を雇つて專業的に行ふ家もある。茶を蒸す大釜をユルリ(圍爐裏)のヒノシリに持ち、クチニツには茶を煎る爐を持つてゐる。燃料の薪炭は時山のお手のもので、其の上に重い薪や炭を軽い茶に變へて運び出すと言ふ、正に一石二鳥の交通不便な山村に特有な地理的意義が含まれてゐる。

時山では男一人が一日に七貫目の茶を揉めば

日當になると言ふ。トロ火で時間と骨を惜しまず、山の人特有の粘りと朴直さで品質本位に仕上げるのである。まだ近代の資本主義の魔力が此の山村まで浸潤してゐないので製茶の工程にも原始的な相が見られる。之に反して川下の時や多良では一日に十四、五貫目も揉んでゐるので、そこに原料は同じでも製茶技術の差から生ずる品質上の必然的差異が現はれる。時山産の茶は良質で値が高く、時村産が七十銭なら時山茶は一回を唱へてゐる。山の人々は之を誇とし此の誇を失はない様に仕事の上に一種の感激性を持つ。それかあらぬか彦根邊の茶商は時山茶をジメ(地芽?)と呼んで歓迎し、之が近江で名高い政所茶に混入されて市場に出されるのである。近江の特約店以外には他地方へ殆んど出ない理由の一は此に存し、之に由て見れば茶に關する限りに於ては時山は美濃に入つてゐるが、近江カルストを越えて近江の經濟圏内に在ると

江濃境上に於ける美濃の山村

言へる。

近江カルストの村々では製茶の副業を見ないのに、五僧から僅かに二軒下つた時山に斯業が發達し、ささやかながらも砂礫層の傾斜面に茶の栽培景が見られるのは地質、氣候から生ずる景觀の著しい相異を物語るものである。

三

時山の村人の生活状態を見れば如何にも山村らしい匂ひが多分にある。村の掟で此の村で生れた男子は決して他村へ養子にも出稼にも出さない、之と共に他村の男子を養子に迎へることもしない、村内だけで養子縁組をするか、又は分家することにしてゐる。但し近來次男三男が京都大阪方面へ出稼に出る様になつたが、絶對に近在の村へ山稼に行くことはない。之は時山炭が品質優良で名高いので其の製法の秘密を洩らさぬ爲であり、又他村に競争相手を作らぬ爲でもあると言ふ。筆者が之に今一つの理由を加へるなら持山が廣い爲に村の人口の自然増加は

究

此の村の經濟上大して壓迫を感じない程度であるからであらう。随つて青年の數が他村に比して多く戸口も漸次増加の傾向を示してゐる。

平地に乏しい溪間の村で戸數が増加すると、それが直接に宅地面積や宅地價に影響する。そこで聚落形態は一坪の平地をも空しくしない溪流に臨む數段の密集階段聚落で、村で相當の舊家資産家と雖も其の宅地面積は比較的小で、家屋の構造や建坪等も地域的制約を受け、此の點では近江カルストの村々とは稍趣を異にしてゐる。一時は石原の傾斜地が宅地として坪十五圓の高値を呼んだこともあると言ふが、最近では一等地で凡そ五圓内外とのこと、因みに近接近江の峠村五僧では坪二圓と聞いた。

山の人の話にあの村は「炭焼ドコ」だが、この村は「荷持ドコ」だと言ふ。炭焼ドコは説明の要もあるまいが、荷持ドコとは背板と杖と屈強な體力をもとにして、山と村との間の險しい山坂を荷を負うて往來する運搬業を以て生計を立

てる人の多い村を指すのである。時山は炭焼ドコであるが、近江カルスト高原上の五僧、保月杉等は炭焼ドコであり又荷持でもある。五僧から近江盆地の麓村八重練まで八貫俵の炭二俵を背板で運ぶと賃金七十錢になる。頑強な人夫なら優に四俵を背負うさうで確かに荷持ドコの名に背かない。最近養老郡の人が五僧附近から滿俺鑛を採掘してゐるが、一日の出鑛高約三千貫之を五僧から時山まで運んで十貫に付二十五錢、一日に二往復は出來るとのこと、保月、五僧の荷持ドコの人々や今では炭焼ドコの時山の人々まで此の勞働に従事してゐるが、時山では女子まで之を内職として歓迎してゐるに反し、五僧では此の位の賃率に満足しない。炭焼ドコと荷持ドコとの日頃の現金収入の差を窺知することが出来る。

山村の風習で特色のあるのは女子の結婚關係である。近江カルスト高原の保月、杉等の村々からは時山へ嫁入る者があるが、時山から以上

の村々へ嫁に行く者は比較的少なく、上流の時山から下流の時村へ嫁ぐ者はあつても、反對に時村から時山へ嫁ぐ者は少ない。換言すれば行政區劃に關係なく女子だけは西の近江カルスト高原上の村々から溪間の時山へ、更に時山から川下の時村へと西から東へ水の流れる方向に移動する。之は農村の子女は山村炭焼ドコの勞働に不慣れであり、炭焼ドコの子女は荷持ドコのキツイ力仕事に不慣れである爲で、其の逆は嫁ぐ者にも嫁を迎へるものにも好都合であると言ふ。婚姻が農山村の經濟機能に基く勞働力の類似性相異性乃至嫁家の勞働に對する適應性の如何に依つて決定されるのは頗る興味深い問題である。斯くの如く男子の移入が絶對になくて、女子のみ近江カルストの村々から移入すると言ふ事がやがて時山が政治地理的に美濃に屬し、交通地理的にも美濃の時村との交渉が多いのに意外に言語、人情、風習等に於て寧ろ近江的である理由の一ともなるのである。時山の夏祭な

どには江州から態々江州音頭の本職が招聘されて來る程である。時山が文化的に近江に接近してゐる別の理由として、女子が奉公に行くと言へば必ず彦根か京都へ出たことをも舉げ得られる。彦根や上方から歸つた女は美濃から歸つたものより嫁入條件が良好である爲と言はれる。

近江との交渉で思ひ付くことは、之は經濟地理的に屬するが、現在近江カルスト高原東端の聚落五僧などは多く米、味噌、溜タヅリ（赤味噌製造の際に滴る液汁で他地方の醬油に相當す）其他の日用品を時山や時村に仰いでゐる。それは筆者の體驗から考へても距離や運搬上の苦樂の關係から來るのであらう。五僧で一般物資は何處から入るかの間に對して青年は言下に時山又は時村から供給されてゐると答へたが、老人は「江州のものは上方物で物が上等だが、美濃物は五等品で物がゴツイから江州から買ふ」と酬いた。此の異つた二つの答から鈴鹿山脈で隔絶された江濃二地方の過去の文化相の相異が漠然と考へ

られるし、衣服調度品其他の半永久的物資か或は食料品其他の一時的消耗品かに依りて其の仕入圈を異にする國境峠村五僧に就いても地理的興趣の湧くのを覺えた。

四

時山の山村生活の春は残雪の消える頃から薪を伐り、晩春から初夏にかけては製茶と養蠶に忙しく、やがて秋ともなれば夜の明けきらぬ頃から就つて山に出て炭を焼く。かくて冬に入れば三尺餘の積雪に閉ぢこめられて冬籠りが始まる。萱で炭俵を編むのも此頃である。農山村救済土木工事には村への道路が良くなる嬉しさからでもあるが、大の男が雪の日には僅か三十銭の日當で喜んで出ると言ふから、以て冬期の收入が如何に少ないかを知り得よう。

山の人々の主食は麥飯である。以前は全村米飯であつたが、今日では僅か二十戸位が其の風を維持してゐるに過ぎない。何と言つても近來山村疲弊の反映であらう。副食として飯谷の溪

川に多いアマゴは生魚の王座を占めるもので、最近其の養殖場設立が計畫されてゐる。山芋など山の幸も勿論豊かである。筆者が川添某氏宅を訪ねた時、思ひがけなく中食の饗應に預つた際には美しい山葵が異彩を放つてゐた。ユルリの火を搔き寄せて焼いて頂いた樞の實入りのかき餅、糸を通して乾してあつた山栗の實、さては一種の甘味ある時山茶、其の一つ一つに高い山の匂ひがあり、皿に盛られた外來の鯛や煮乾の御馳走にも山村らしい用意のゆかしさが味はれた。積雪量の多い關係で軒が低く、爲にほの暗い「勝手の間」で巧みに柴を焚く主の手つきに見入りながら、メラ／＼と燃えるユルリの火にあたつて茶を飲んでゐると、此處が一番住みいゝ平和な處であるやうな氣もして次の事柄を十分理解することが出来た。

何處でも山村に生活する人々は農村の者に比べて郷土意識が極めて強い。時山でも五、六十年前から山を他村の者に賣ることを村の掟を以

て禁止した。土地立木の質入も譲渡も一切許されなかつた。若し山が他村人の手に落ちやうとする時には親類が之を請戻し、親類の力でも及ばぬ場合には村で之を阻止する。山に生れ山に住み山の本で炭を焼いて過去何百年か過して來た山人達が太古の姿其の儘のやうな山村を護らうとするのは、實に近代的な生活權の擁護とのみでは解し得ない、深い傳統の力と熱い山への愛着の情が籠つてゐるのである。(昭和十年五月五日稿)

新著紹介

○日本近世饑饉志

小野武夫著 學藝社發行
定價三圓八十錢

近世の飢饉としては關西では寛永、享保、東北では元祿、寶曆、天明、天保の数度にわたる中にも寶曆と天明と天保とが最も激烈であつた、本書は天保七年渡邊華山が京都三條にたてた救小屋の圖をはじめ、寶永飢民錄、自然未聞記、天明年度凶歲日記、凶年記情、凶年藏主稿、天明三年太田庄騷動記、天保年中已荒子孫傳、救饑製食方集書、救荒孫之杖、

飢饉之節困窮人手當末仕法帳、農家心得訓及饑饉通考の十二篇を集めたものであるが、天明年度凶歲日記のごときは、いかに飢民が常規を失うかを告ぐるの惨狀録ともいふべく、涙なくしては讀むことが出来ない、備荒貯蓄の必要もあることではあるが、飢饉の人心に影響する所は獨り生命のみの問題ではない、識者の注意を要する所であると信じる。(藤田)

○康徳二年版滿洲國現勢

滿洲國通信社 定價二圓五十錢

昭和十年三月一日發行の滿洲國現勢は菊倍版四七二頁の尨大な形で出版された、寫眞も鮮明であり記事も豊富である、めまぐるしく發達してゆく滿洲を理解せんとする人士に一讀をすゝめる。(藤田)

○風害を被つた京都の風致

京都府土木部

都市計畫京都地方委員會は昨秋の風害をうけた社寺名勝七十四圖版のコロタイプ版を出版し且つ風害地圖と損傷概況とを合せて本報告書を頒つた、我等はこの圖版によつて、災害の恐るべき結果を永久に記念しうるのを喜ぶ。(藤田)

○郷土本位地理學論叢

愛知縣地理學會 定價八十錢

名古屋の岡田君、夏目君、耕崎君などを中心として地理學會が昭和三年二月に創立されてから八星霜、會員諸君の涙ぐましい努力の結晶としてこのたび菊版一三二頁の論叢が世に出た、集むる所は日本の古尺と土地(藤田)、滿洲國に於ける